

## 炭焼き技術の伝承について

当西田地区の炭焼きに於いては、昭和30年代まで盛んに製造されておりました。秋の農産物の収穫が終わったら、農民はそれぞれ山に入り炭焼き作業に取り組み、翌春の農耕が始まるまで焼き続けられました。あちらこちらの山から炭焼きの煙が立ちのぼる風景は、冬の風物詩としてとても良い眺めでした。

ところが、戦後我が国の経済は急速に成長し、生活のための燃料は木炭からプロパンガス・石油等に代わり、木炭は姿を消すこととなりました。時は過ぎ、平成10年代になると田舎の良さが見直され、昭和の時代が懐かしく日本の原風景が注目をされるようになりました。また、それと同時に中山間地域の過疎・高齢化も進み、村が衰退してきました。こうした中、当地区では炭焼き技術をもった高齢者有志が昔を懐かしむとともに若い世代に技術を継承したいと10名程度のグループを作り、平成13年に県の補助事業「中山間地域集落維持活性化緊急対策事業」を利用して、炭窯の建設から製造までを始めました。以後、毎年冬季に二釜、約400キロを生産しています。製品は10キロ入りの箱詰めとし、名称を「ザ・木炭よずくの里」とし、小学生の体験学習・各種イベントの燃料・病院・旅館の火鉢に使用されています。商品としての営利は目的としないで、グループ員の交流の場として、また、衰退しつつある村の活性化の一助として活動しています。





13





Figure 1. A traditional oven or kiln used for drying wood.



Figure 2. A traditional oven or kiln used for drying wood.



